1953E), 土佐梶ケ森 (伊藤, 1938T), 筒上山 (芹沢, 1970N), 朝鮮金剛山 (T. Uchiyama, 1902T-type, M. K., 1910F), 済州島 in sylvis Torsoumi (Taquet, 1910T) などである。九州からの報告もあるが, 確実な標本は見た事がない。

10) ホウライベニシダ (新称) は中国大陸南部やインドシナの *Dryopteris integriloba* に非常によく似ているが, 胞子のう群が中間生で, 鱗片がやや幅広く, 小羽片の辺縁にしばしば鋸歯がでる事などで区別できる。

11) ウスバベニシダ (牧野・根本, 1931) は葉柄に黒色の鱗片が密生する点でベニシダとは明らかに異なり, 独立種として扱うのが妥当である。

12) クマワラビとオクマワラビの雑種と推定されるシダには適当な学名がない。アイノコワラビ (伊藤, 1939) は同一のものと思われるが, 基準標本が見当らないので, 新雑種として記載した。

13) コヤマムスメシダ (新称) はリュウキュウシダやハネガエリシダに似ているが, 葉柄や中軸に鱗片がつき, 葉裏脈上に多細胞の毛がある点で異なる。ナガバノイタチシダ類にも似ているが, 脈端がふくらんで半透明になり, 鱗片が二型性で, 多細胞の毛がある。最下小羽片が上先きにつくので, 一般の定義に従えばカナワラビ属に含まれるが, 小羽片のつき方だけでオシダ属とカナワラビ属を分けるのは疑問があるから, ここではオシダ属の一種として記載した。

○ヤマノイモの根茎 (津山　尚)　Takasi TUYAMA; On the tuber of *Dioscorea japonica* Thunb.

一昨年 12 月静岡市在住の友人石上剛氏からヤマノイモのいわゆる“自然生”(ジネンジョウ) を頂いた。各地で小量に売られてもいるが, 節くれ立った根茎の様子が造型的にも面白かったので, 表紙のカットにして見た。根茎から発生する細根の基部は急に太くなり, 時には円盤状を呈していてこの種の特長を示している。“自然生”でも土壌の深くやわらかい所のものは, 細い頸部から下方は大体円柱状の棍棒形であるが, 石があったり, 地下水が高い所では, その部分を避けてまがりくねる。収穫期の秋が深まると, 地上茎の一部を残して, 上方は枯れ去り, 根茎をさがし当てることが困難になる。このために前もって根元にムギの種子を播いておいて, 冬期の堀取りの目印にすることもあるという。カットの標本は今は静岡市に併合された久能尾 (キュウノオ) の山林で採れたもので, 斜線の部分は堀取りの際にスキで損傷した部分を示す。日本のヤオヤの店先で普通に見られるツクネイモは根茎が扇状に水平に広がっている。東インド地方では *Dioscorea* は重要な食料品であり, Ochse の Indische Groenten には各種の Yams の根茎の図が多く描かれている。中には一度下向した根茎が反曲して再び上向して来るものもあるらしい。こうした tropism の各種, 各品種, および環境による変化は研究の対象になりそうである。　(お茶の水女子大学)